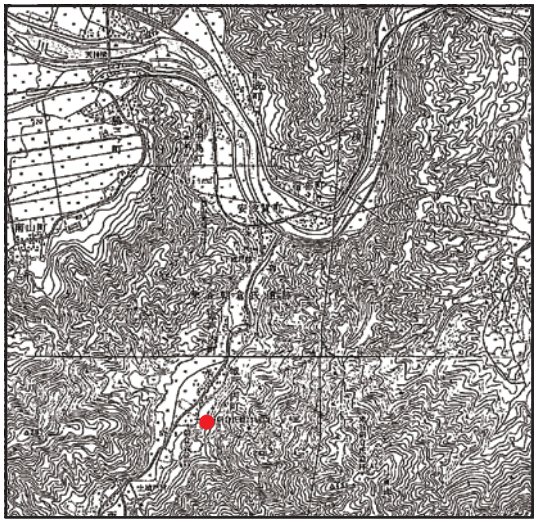
６．一乗谷朝倉氏遺跡（第153次）

いちじょうだにあさくらしいせき

所 在 地：福井市城戸ノ内町
調査原因：史跡整備
調査期間：令和２年９月１日～10月28日
調査主体：一乗谷朝倉氏遺跡資料館
調査面積：50㎡
時　　代：室町時代



位置図（S＝1/50,000）

調査の概要　令和２年度は崩落の危険度が高い朝倉館背後の土塁や斜面について、令和３年度以降に予定している整備工事のため、戦国期遺構の状況を把握し、工事実施設計に当たって遺構の保護を図る目的で発掘調査を行いました。対象地はいずれも字水谷地籍で、北から対象地①～③としました。表面観察から遺構の残存状況が良好と判断される箇所に計５本のトレンチを設定しました（図１）。

対象地①は朝倉館後背を区画する北東角から南へ延びる土塁部分です。朝倉館後背の土塁に調査を行うのは初めてです。土塁に伴う空濠は、近接する南陽寺から英林塚（英林孝景墓所）への遊歩道として整備されています。整備が行われたのが調査体制が整う前の古い時期のため、発掘調査は行われていません。本来であれば土塁と空濠を一体で調査する必要がありますが、遊歩道を破壊することは不可能なため、空濠については調査を行っていません。対象地②は朝倉館跡庭園に導水するための貯水池の南に広がる斜面部分です。近年崩落が激しく、原因を特定する必要がありました。対象地③は館後背の南東角、通称観音山と呼称される部分です。目の前に先ほど紹介した英林塚が位置しています。この対象地では、見た目にも土塁の幅など、対象地①の土塁とは構造が異なることが予想されました。

対象地は崩落の危険度が高いと紹介しましたが、どの箇所も急傾斜で高さがあるため、調査は危険で困難でした。以下、対象地ごとに遺構・遺物を報告します。

対象地①

遺構　第１トレンチは土塁の北東角部分で、空濠から最も高低差があります。上部では表土は薄く、濠底に近い裾部では破砕された風化礫を含む流土が分厚く堆積していました。土塁が構築される前の山肌である旧表土は確認できず、風化礫岩盤層の地山の上に破砕された風化礫を含む盛土で土塁が構築されていることが判明しました。土塁の最大傾斜角は60度となっています。トレンチ下端では、岩盤が水平に加工されており、一部ではありますが濠底と考えられる部分を確認しました（写真２）。第１・２トレンチで共通して確認できており、濠底は水平と推定できます。空濠の形状は箱堀で、遊歩道はこれをそのまま利用しているようです。第３トレンチでは、破砕された風化礫を含む盛土層と岩盤層の間に、黒く濁った旧表土を確認しました（写真１）。第１・２トレンチ側では表土を完全に掘削し、第３トレンチ

対象地②

遺構　第４トレンチは、湯殿跡庭園に近接する貯水池南側の斜面です。元の地形より急勾配に掘削されている箇所と考えられます。表土下には上部で黒ボク層の堆積が、下部で岩盤層が確認できましたが、盛土や遺構は確認できませんでした。下部の岩盤層では、ミミズを追ってモグラが激しく活動しており、硬い岩盤層をもモグラが侵食していることが判明しました。これにより柔らかくなった表土が、雨や雪の影響で崩落している様です。

遺物　室町時代のかわらけ片が数点出土しました。観音山の頂部に向かって平坦面が複数存在するため、その範囲からの転落品と考えられます。

対象地③

遺構　第５トレンチは通称観音山の頂部に近い土塁斜面に設定しました。傾斜が急なため、上部の表土は薄く、裾部には崩落土が分厚く堆積していました。表土下に盛土は確認できませんでした（写真４）。元々東側から張り出していた尾根の馬の背状の部分を掘削して土塁と濠としたものと推定できます。濠底には土塁状の高まりが存在したため、南側にＬ字状にトレンチを拡張し確認を行いました。結果、石列が認められ、石積みを伴う低土塁により空濠が仕切られていたことが判明しました（写真３）。館後背への水の流れ込みを防ぐなどの機能が推定できますが、今回は部分的な調査のため、今後総合的に調査を行う必要性があります。

今回の調査目的とは異なるため発掘は行っていませんが、対象地③の頂部には広範囲に平坦面が構築されており、この部分は盛土造成されているものと推定できます。また、頂部平坦面には南北 11.0m、東西 7.2m規模の基壇が現存し、礎石が認められることから、「観音山」の名前の通り堂跡と推定されます。朝倉氏は初代英林孝景以降、京都清水寺の千手観音信仰が篤く、清水寺には今も朝倉堂があるほどです。この堂跡の眼前に英林塚が位置することもこれに深く関係するものと考えられ、今後の調査・研究に注意を要します。

遺物　室町時代のかわらけ片が裾部の堆積土から出土しました。頂部からの転落品と考えられます。ただしその量は極めて少なく、恒常的な生活空間ではないことを示していると考えます。

まとめ　対象地①では、盛土で構築された土塁の基礎的なデータを把握することができました。最大傾斜角は 60 度、残存高約７ｍです。盛土の流出を考慮すると推定で元の高さは８ｍほどであった可能性があります。

対象地②では、モグラが崩落に大きな影響を与えていることが判明しました。遺跡の保存を図るために、その対策を考えていかなければなりません。対象地③では自然地形を利用して館南東角の区画が構築されていること、また、空濠内に低土塁が構築されているなど新知見を得ることができました。

対象地③の頂部平坦面は、対岸にある復原町並を一望できる非常に見晴らしがよいところです。一乗谷川右岸の最高高度を誇る朝倉館の南東角に、物見櫓ではなく観音堂と推定できる堂跡が存在することは、当時の朝倉氏の思想をよく表しているのではないかと考えます。今回の調査面積は狭小なものですが、新たに検討すべき課題も多く、今後の遺跡の保存・活用につなげていきたいと思います。　（宮﨑　認）

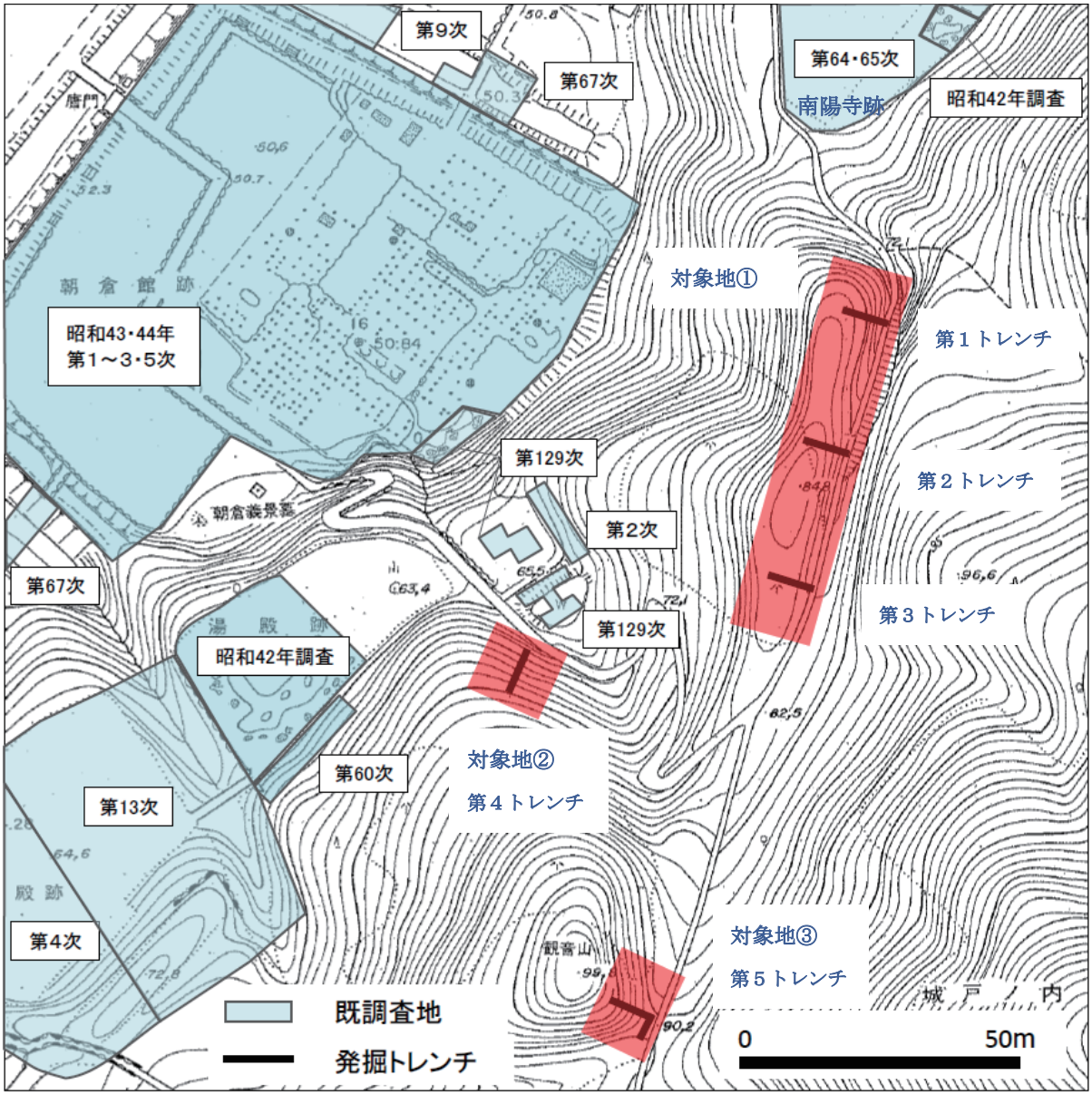


図１　令和２年度発掘調査地位置図（赤枠が対象地　黒色がトレンチ）

側では表土を掘り残したものと推定できます。第１トレンチでは空濠裾から頂部までの高さは残存値で約７ｍありますが、第３トレンチでは約５ｍと低くなっています。第１トレンチでは盛土が流出しており、本来もっと高かったと推定できます。対象地①では各所で崩落が確認できますが、この盛土が崩落していることが確認できました。崩落の原因は竹の根からの浸食や一部モグラの活動が原因と判断できました。

遺物　対象地①の３つのトレンチからは遺物は確認できませんでした。土塁上に施設が存在しないため、こうした結果になったと推定できます。

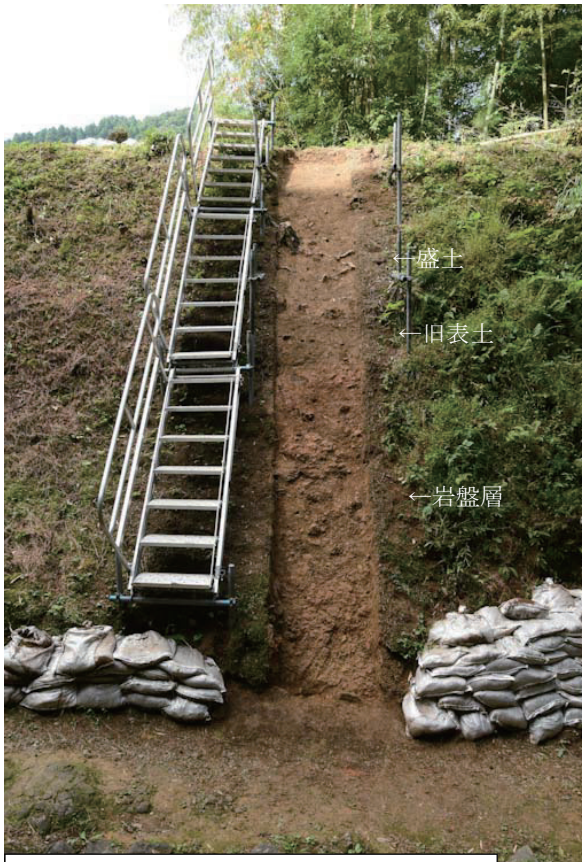


写真１　第３トレンチ全景（東から）

写真２　第２トレンチ裾の様子（北から）

写真３　第５トレンチ濠内低土塁（南から）

写真４　第５トレンチ全景（東から）